

全久院報

松本市深志3-7-50 電話 0263-36-3211

前住職の一周忌などの法要



前住職が平成19年11月28日に遷化し、12月3日に密葬、新御魂、四十九日法要、彼岸、6月10日の本葬、8月5日の新盆、11月18日に一周忌と法要を進めてまいりました。その間大変多くの檀信徒の皆様、茶道関係者、親戚の皆様にお参りいただいたり、法要のお手伝いにご協力をいただきました。このように心のこもる法要をしていただきましたこと、皆様のおかげと心より感謝申し上げます。

一周忌の導師をお勤めいただきました正麟寺東堂さまの法語に、「禅味掬すべし老俊翁、文武両ながら勝り万事通ず、蜜を添え労に酬いん此の一味、忌景一周徳風を慕う。」（禅の味を手のひらにすくわれた老師さま、文武両道に優れ万事に通じていらした、蜜湯を献じてその功績を讃えます どうぞお召し上がりください、一周忌に当たり遺徳を慕っております）とございました。

東堂の若い頃の修行は厳しく、喧嘩沙汰で切磋琢磨していたと聞きます。正麟寺東堂さまからも「喧嘩沙汰で本当にいろいろ教わった」と昔をしのぶ言葉を折に触れ聞かせていただいておりますので、この法語はその思いが伝わるものとうれしく頂戴いたしました。



写真をご覧いただきたい
と思います。本堂大屋根の鬼

本堂の大屋根瓦葺き替えを計画しています

瓦です。地震などの影響でかなりずれてしまいました。また、ほかの箇所も50年前の修理のため痛みがひどく、何箇所か雨漏りしている状況です。また、地震にそなえ耐震構造への改修をすると莫大な費用がかかるため、屋根を軽くすることで対応したく考えています。しかし、最近の経済不況にあたり寄付のお願いをし



まずこと檀家の皆様のご負担は計り知れず、大変心苦しく思いますが、なにとぞご理解いただき、ご協力いただきたく存じます。

計画は、現在見積もりを取っておりますが、大屋根の葺き替えに5000万円、本堂裏のトイレ工事に600万円、檀信徒用厨房に600万円、合計6200万円くらいになるかと思っております。

護持会費の積み立てから1000万、宗教法人からも支出する予定でいますので、皆様からは一口25000円、平均3口の寄付をお願いしたいと考えています。春ごろより趣意書をもって回りますので、よろしくご協力をお願いいたします。



境内散歩 — 毘沙門天 —

本堂の北隣に稲荷堂があり、北側の回廊に続きます。その北側の回廊が始まる付け根のところに、全久院の毘沙門様（国家鎮護・戦勝・福德増進の仏）が安置されています。この像は清水の望月家より寄付されたものです。毘沙門天は四天王の中心的な地位を占める多聞天（ヴァイシュラヴァナ）を単独で奉る時に使われる名前です。仏国土須弥山の中腹に住み、北方を守る守護神で、吉祥天は妻といわれています。多聞天の名前の通り、仏教の教えを多く聞いて精通しており、仏教と仏教を信じるものを守護します。

甲冑を身に着け、中国の武人の姿をしています。右手を高く上げ、開いた手のひらの上に宝塔を置き、左手には金剛棒を持っています。怒りの相をしており、二体の邪鬼を踏みつけて立っています。そこで邪鬼や邪悪なものを寄せ付けないとされ、人間にとって最大の敵である煩惱を撃退するものとして信仰されました。

四天王は5世紀の仏教伝来とともに日本に伝えられました。大阪の四天王寺は聖徳太子が仏教受容に反対した物部氏を滅ぼすための祈願所にしたとされています。悪鬼が侵入するとされる北の方位を守るとされ、平安京では北方の鞍馬寺と、正門にあたる羅城門の楼の上に安置されています。中国の唐の時代、西域を治める都護符が異民族に包囲されたとき、城門に毘沙門天が現れ、城を守ったという故事に基づいたとされています。楠木正成の幼名を多聞丸、上杉謙信は自らを毘沙門天の生まれ変わり信じ、戦旗に「毘」の文字を入れるほど日本人の信仰を集めました。



現在の邪気は何でしょうか。鬼というよりは人間のあまりにも身勝手な煩惱でしょうか。世界各地での戦争、テロ、経済不安。日本での肉親間の凶悪事件、子供同士のいじめ。世界の問題から身近な問題にいたるまで、私たちの心の中の鬼、煩惱がその原因だと思います。その煩惱を私たちの心の中から追い出してくれるのが毘沙門様です。全久院の北の回廊にいて、鋭い眼で私たちを見守ってくださいます。

全久院の催しもの

全久院の境内には「松本調理師会」の魚鳥類萬霊供養塔と包丁塚があります。松本市内の調理師さんたちが昭和43年6月に建立したものです。また供養祭を行いその後、日ごろ魚鳥類の命を頂いていることに感謝し魚を放す「放生会」が行われます。その時魚を入れる桶が昭和28年8月に作られています。



去年も7月29日(火)に供養祭が行われました。食中毒の起こりやすい時期ということもあり、「魚鳥類に感謝すると共に、もう一度気を引き締めて調理に向き合おう」との会長さんからの挨拶がありました。松本の調理師さんのどんな小さな命に対しても、感謝の意を持って包丁をさばく心意気を感じます。松本では「いただきます」「いただきました」は普通に使われていることばですが、他県に行って「いただきました」というと不思議そうな顔をされます。松本の方言だそうです。「食物の命をいただきました、という意味です」と説明すると納得してもらえます。命が軽んじられる現在、私たちがもう一度考え直さなくてはならない大切なことではないでしょうか。この写真は神道前の女鳥羽川にて調理師会員と鯉・金魚・うなぎを放しているところです。こんな気持ちで松本の調理師の皆さんが私たちに食を提供してくださっていることを是非知っていただきたいと思います。

全久院の集い

ご詠歌 昨年は全国大会が福島県福島市で開催されました。ご詠歌の会から松尾さんと轟さんが参加しました。5月28日(水)にご詠歌の発表をし、翌日は仙台の松島観光などをして、緊張とリラックスの時間を過ごしました。大会には永平寺の新しい福山禅師さまがご来席され、最後まで皆さんのご詠歌をお聞きになりました。写真は発表を終え禅師様の前を退席する松尾さんです。



また、10月16日(木)長野県県民文化会館にて長野県大会が開催されました。第一宗務所(東北信)から6ステージ、第二宗務所(中南)より14ステージの発表がありました。松本は13番目に「大本山永平寺二祖懐奘禅師讚仰御和讚」をお唱え

しました。終わって市内のホテルで食事、ゆったりと一日を過ごしました。

東昌寺副住職、飯島恵道さんに指導していただき次第に曲を増やしています。現在7人で稽古していますが、皆さんも一緒に稽古してみませんか。会報の掲示板のページに日程を載せてあります。10時から11時半まで練習。終わって皆さんでお茶話し。いろいろな話に花が咲きます。また来年の全国大会は大阪です。是非ご一緒に！

座禅会 今回は座禅会のメンバー（坂井律子）さんに寄稿していただきました。

座禅会へのお誘い

数年前、座禅会が行われると聞き、物見高い私は、ついうっかり参加してしまいました。以来数年間、わかったようなわからないようなお経の勉強をし、冬は底冷えのする本堂で座って、何が楽しいのかわからない会に、用事をやり繰りして、せつせと通っております。それどころか、参加できなかつたときは、なんとなく寂しい気さえするのです。なんなのでしょう、これは。

過日、母が亡くなった直後に座禅会がありました。ずっと眠れなかつたのが、座禅会の夜は、久しぶりに眠ることができました。たぶん、本堂に座ることで、条件反射のように、呼吸がゆっくりになり、心が落ち着いたのでろうと思っていますが、いつも時間や仕事・家族に振り回されている生活の中に、一瞬、すべてから解き放たれて、たった一個の人間になる時間があるというのは、素晴らしいことだと思いました。

毎月楽しみにしているのも、そんな開放感を、無意識の部分が快く感じているからではないかと、最近は思っています。みなさんも、是非参加して体験してみてください。お待ちしております。

観音講 観音講では観音様への読経、ご詠歌、唱歌の合唱、精進料理と盛り沢山の内容になっています。大黒が指導してきた唱歌をまとめ四季折々の歌を加え20曲の歌集を作りました。「雪・野ばら・もみじ・夏の思い出・おぼろ月夜・春がきた・早春賦・浜辺の歌・故郷・千の風になって」などバラエティーにとんだ曲にハーモニーをつけてゆこうと思います。

ちなみに、今年の全久院新年会には「曹洞宗宗歌・春が来た・早春賦・故郷」を歌う予定です。一緒に心休まる時間を、とご希望の方は随時申し込みを受けておりますのでご参加ください。

教区本山講 この会は2年に1回、永平寺か総持寺のどちらかをお参りし、近郊の旅行をする会で、松本市中の曹洞宗寺院の檀家様が参加します。昨年は9月11日12日の両日、総持寺様をお参りし、鎌倉を巡って来ました。

総持寺では弟子の俊浩が修行してますの



で、諸堂拝観の案内をしてもらいました。詳しくは「俊浩本山奮闘記」に記します。鎌倉は建長寺を訪問しました。SVA 会長の別所温泉安楽寺若林師の紹介をいただき、一般には決して開放しない修行道場を拝観させていただきました。修行僧の寝泊りする座禅堂には包まるようにして眠る布団がキチット置かれていました。それを見るとキーンと張り詰める厳しさを感じました。



今回は2年後永平寺様をお参りし、旅行します。来年 三代沢さんと道場前にて申し込みのチラシにて皆様にお知らせします。ご一緒にいかがでしょうか。

護寺会より

第三教区の護持会研修会は9月9日(火)、正麟寺様で開催されました。松本市内のご寺院の総代様を中心に100人ほどが集まり、半日の研修と懇親会を行いました。講師は宗務庁より派遣され、禅師様の代わりに第二宗務所管内を回り説教をします。ですから曹洞宗の布教の最前線といえると思います。

宗務所護持会研修会は10月28日(火)箕輪の養泰寺で開催されました。こちらは宗務所が主催します。今日悲惨な事件が多発していますが、心や家庭のあり方をもう一度見直すことによってその原因を見つけ出そうという趣旨の話をいただきました。

本年はさらに、第三教区護持会独自で「ほのぼの文化祭」を3月15日(日)3時より全久院にて開催します。菩提寺を護持する各寺院の檀信徒の皆様の繋がりや連帯を深めることにより、より良い地域を作り、檀信徒の皆さん一人一人の心のよりどころにしたいという趣旨の集いです。チラシを同封してありますので、是非ご参加いただきたいと思います。

仏教ミニ知識

…西遊記 本当に三蔵法師は8日間で中国へ戻れたのか?…

右の写真は中国興教寺の玄奘求法の図です。西遊記に登場する三蔵法師の本名は「玄奘三蔵(602~664)」。西遊記は架空の物語ではなく、実際18年をかけインドを旅し、657部のお経を持ち帰った苦難の求法の旅を戯曲にしたものです。玄奘はその後19年間で76部1347巻のお経を中国語に翻訳し、中国仏教の創始者的存在といっても過言ではないと思います。

玄奘は洛陽に近い緱氏県の名家陳氏の末子として生を受け、10才で父を失い、出家した兄を追い洛陽の浄土寺で学びました。13才で出家、経を一目で理解し、2度目で記憶したと言われる天才でした。しかし研究するほどにそれまでの仏教の教義や解釈がまちまちであることに気付き、インドに行き完全な経本を持ち



帰りたいとの思いが強まりました。当時僧侶の国外出国は国禁とされ、再三の請願も却下され、ついに627年8月26才の時、単身、秘かに長安を脱出、求法の旅に出ました。昼は潜伏し、夜進むという強行軍のすえ、長安から天山山脈、バーミヤン、ガンダーラ、インドのマトゥラー、クシナガラ、ベナレス、祇園精舎（当時は荒れ果てた礎石のみ）、ブッダガヤと仏教の聖地を訪れました。

旅の途中タクラマカン砂漠では水も食料もなくなり、力衝き果てようとした時、「観世音菩薩よ、玄奘のこの行いは財利を求めず、名誉を願うものでもない。ただ正法を求めのためにここまで来たのです。群生の苦を救ってくださる観音菩薩よ、今の玄奘のこの苦をどうぞお救いください」と念ずると、涼風が吹き、水場にたどり着けた、などの話が伝えられています。また、633年4月ナーランダ寺の仏教研究センター（仏教大学）にたどり着くと、大学者シーラバトラは「文殊菩薩のお告げで玄奘が来ることを知っていた」と迎えたと伝えられています。数々の神秘的な力に守られながら、玄奘は4年間唯識学を学び、さらに3年間南インドにて著名な師について学び、17年間で130ヶ国を訪問し、642年春帰途につきました。パミール高原から西域南道を通り長安へと帰り着きました。その間も于闐の手前で川を渡る時、ヒマラヤの雪解け水が濁流となり、経典を積んだ象が流されました。二度と手に入らぬ経典ばかりで、失うわけにいかず、下流を廻り経典を再び集めるなど多くの苦難を乗り越えての帰国だったのです。644年唐の太宗は玄奘の名声を聞き、「速やかに来て朕と相見すべし」の勅を送りました。645年正月、18年の求法の旅終え長安に帰りました。梵本（インドの古語）657部を含め、220箱の経典と多数の仏像を持ち帰りました。太宗は長安の弘福寺に翻訳院を設け玄奘を迎え入れ、翻訳を分担する僧が集められました。「大般若経」600巻と、「成唯識論」の翻訳に最も力を注ぎ、梵本の一字もゆるがせにしない翻訳を完成させました。5日間で1巻の翻訳をこなした計算になります。この翻訳が完成することにより、仏教の教理体系が整い、法相宗が成立しました。このように玄奘の翻訳は中国仏教にとって一時代を画し、玄奘以前の翻訳を旧訳、玄奘の訳を新訳と呼ばれました。648年唐の高祖は母の追念のために、長安に大慈恩寺を建て翻訳院を作り、玄奘を迎えました。652年大雁塔（菩薩が雁となって捨身して身を与えたという故事があり、その雁が葬られているといわれる）が作られ、経本や仏像を納めました。664年長安の玉華寺で亡くなると、高祖の勅額「興教」を賜り興教寺となり手厚く葬られています。私が十数年前訪れた大雁塔の写真ですが、現在も大切に保存されています。



ところで玄奘はインドよりどのくらいの年月をかけて長安へ戻られたのでしょうか？西遊記では「願わくばわが世尊よ、あの聖僧をして速やかに、すべからく8日のうちに、東土に帰着せしめ・・・」とあります。きっと勅斗雲(きんとうん)に乗って帰って来たのでしょうか。しかし実際は3年の歳月をかけ帰国しました。私たちは玄奘により翻訳されたお経を毎日お唱えさせていただいています。しかしその背後にこのような苦難を乗り越えた、玄奘の本当の教えを求める真摯な求道心があったことを肝に銘じたいと思います。

茶道コーナー

大寄せ茶会 全久院では毎年11月3日(文化の日)に恒例の大寄せ茶会を行います。一昨年は東堂の体調が悪化し、急遽中止しました。一昨年は東堂の茶の歴史にまつわる道具組をした茶会を考えていたので、その会記の通りの道具で追悼茶会を行いました。



学生時代にお世話になった先生からいただいた道具、昭和28年表千家先代の家元即中齋宗匠からいただいた乱飾りの相伝の時の掛け軸と茶杓、長野県支部の周年記念の献茶式で使った道具、大変親しかった篠田義一先生の道具、親しく茶の指導をいただいた堀内宗心宗匠の書付のある道具など、どれも思い出いっぱいの道具で茶を点てました。おいでいただいたお客様も東堂を偲んでいらしてくださった方ばかりでした。その道具に因んだ思い出をたくさん語ってくださいました。

表千家の茶会の道具は、利休さんか歴代の千家宗匠にまつわる道具を取り揃えるのが基本です。他県では千家にまつわる歴史を背景に、道具組をして、茶の趣向を凝らすことができますが、長野県にはそれに値する道具はなく、また茶の文化も歴史もありません。松本にもお城に茶碗一つでも残っていたら、それを中心に道具組ができるのにと、何度も悔しい思いをしたものです。

しかし今回の追悼茶会では東堂の茶の歴史のなかで集まった道具を使ったので、さまざまな話しがお客様共々することができ、今までにない思い出に残る茶会になりました。



表千家長野県支部50周年

東堂は長年当支部の事務長をしてきました。それを引き継ぎ現在は私が事務長をしています。というのも、昭和33年長野県支部を設立するに当たり、東堂が中心になって設立準備をし、その功績が大であったからです。設立に当たって家元、ならびに

表千家事務局とのすさまじい掛け合いの様子は何度も東堂から聞きました。

設立に当たり大変お世話になった先代即中齋家元宗匠は全久院の茶室開きにもおいいただき、現在の而妙齋宗匠は設立30周年の大会に全久院においでいただきました。その支部も今年設立50周年を迎えます。今回は6月21日(日)善光寺本堂にて而妙齋家元宗匠による献茶の御奉仕をいただき、大勸進にて茶会を開きます。一番祝いたかったのは東堂のはずですが、時を合わせたかのように亡くなり、時は進み私の代になっています。私がどんな茶の道を進むか、東堂が難しい宿題を置いていったのだと感じています。

住職の活動

ビルマ難民キャンプ

昨年2月21日(木)より25日(月)までタイ国内にあるビルマ難民キャンプに行ってきました。バンコクから夜行バスで北へ9時間。一般道を時速100キロ以上で飛ばして行くので800キロ北ということになるで



しょうか。丘陵地帯にあるメーソット町から西に向かうとまもなくビルマ国境です。この丘の向こうがビルマ、という丘の斜面にへばりつくように竹やニッパやしの葉で作られた家が並んでいました。

ここはビルマ軍事政権に抑圧されたカレン族15万人が收容されているメラキャンプです。一軒の民家ムラボーさん(49才)宅を訪れました。1984年、メラキャンプができた時からの住人です。ミャンマー軍の荷運びに駆り出されそうになり、金を払えば免除されるが、金がなく断れず、身の危険を感じ、国を捨て難民となりました。子ども4人、孫3人、夫婦の9人家族構成です。食料はTBBCというNGOの連合体がキャンプでの配給を統括しており、1ヶ月大人には15キロ(子供は半分)の米、ナムプラ・塩・豆・炭・唐からし(3ヶ月1人100g)、小麦粉・砂糖(3ヶ月1人につき500グラム)が配給されます。野菜・肉・魚の配給はなく、豚を飼い、それを売って必要なものを買っています。その他NGOで先生や病院職員の職を得、月給500パーツ(約2000円)の収入で生活しています。ビルマでは軍事政権のもと人権侵害、強制労働に駆り立てられる、政府より高額の税金を課せられるなどの迫害を受け国を捨てる人が後を絶ちません。現在もタイ国境線付近に7つの難民キャンプがあり数十万人が收容されています。メラキャンプ住民委員長ジョリーさんに面会すると次のように語ってくれました。日本政府としてミャンマー軍政権に自由や民主化を進言して欲しい。諸国には難民定住の受入れを促進して欲しい。そして日本国民には四半世紀もキャンプに收容され続けているビルマ難民が居るということを知って欲しい、とのことでした。

カレン族はキリスト教徒だと聞いていたのですが、キャンプを視察していると仏教寺院がありました。寺の名前はスリサナ寺。住職はビセヤー師32才。彼からもお話しを伺いました。「カレン人が難民となっていること、難民問題の背景、仏教の僧侶が救援活動をしていることなど、ぜひ日本に伝えて欲しい。私たちのことを知らせて欲しい」とメッセージをいただきました。



ビルマの竖琴（民族の誇り）

收容されているビルマ人は第3国へ定住する、自国に帰るなどの希望が見えないなかで、人権もなしに不自由な生活を強いられています。25年間のキャンプ生活でキャンプの中しか知らない子供を育てています。それでも生きていかざるを得ない彼らは、その存在を知ってもらうことだけが生きている存在理由なんだと思います。自分だったら果たして生きていけるだろうか、心が締め付けられます。自分の生命と運命を他の人に託すことでしか生きてゆけない彼らにとって、自分自身でも人として命をいただいた意味を全く確認できないし、生きていく意味を見いだせません。これほど人間にとって辛いことはありません。それを理解してくれる人がいるということ、誰かが自分たちを見ていてくれるということだけが、彼らの存在理由なのです。

私の長女苑香が昨年8月キャンプに入りました。彼らの民族音楽を楽譜にするのが役目です。「極限まで追い込まれている人とキャンプで活動していると、救援するというより、自分が人間として学ぶことが多い」というのが彼女の感想でした。学び続けることができる環境に居続けたいと思います。



SVAのタイ人スタッフと（左 苑香）

俊浩本山奮闘記

俊浩は大本山総持寺に修行に入って今年3年目を迎えます。学生時代はあまり話さず、自分を表に出すこともなく、目立たない、悪く言えば存在感がない男の子という印象でした。「全久院の集い、本山講」のコーナーで紹介しましたが、教区参拝の皆様の諸堂拝観案内をしてもらいました。以前に布教部に居たため案内係ができるので、特別許可を得てこの役をお願いしました。型どおりの説明以外に、座禅堂では実際座禅をしながら自分の体験談を織り交ぜて笑わせながら案内をしていました。彼のことを知っている住職さんからも「変わったね！」の言葉をいただきほっとしました。本山での生活や修行に合っていたようです。睡眠や食事を極端に制限され、まったく自分の時間が持てない集団生活で、寝る時も座禅堂の一畳をもらって仮眠をとるような毎日です。現在は録事寮(ろくじりょう)に

配役されており、本山での書類や記述、書き物を担当する役に当たっています。

まだ確定ではないようですが、一月上旬より、本山の修行の中でも最も厳しい役が回ってくるようです。法要の際、本堂の裏に居て、お経本を出したり、焼香の台を出したりなど法要における裏方を一切取り仕切る殿行(でんなん)という係りです。本山では法堂芸者(はっとうげいしゃ)といわれ、足の運び、曲がり方、経本の渡し方など体の動きすべての型が決まっており、修行僧の憧れの役になっています。が、その反面一度に重い経本を持てるよう、その訓練は大変厳しく、体がついてゆけず脱落する修行僧も出ます。

俊浩は他の修行僧より長く、もう5年本山の修行をしないと全久院の後継ぎになる資格が取れないため、この役を何期(一期3ヶ月間)か担当する可能性があります。彼の応援も兼ねて、春その役についていたら是非檀家の皆さんで本山参拝を企画したいと思います。本山に泊まり、修行僧と共に修行をし、朝のお勤めでは、皆様のご先祖様の供養をしていただき、殿行のきびきびした、すがすがしい動きの中でお参りできたらと思います。



説明をする俊浩(左)

大黒コーナー

昨年6月22日(日)県民文化会館中ホールにて、オペラ、ドン・ジョバンニを上演しました。モーツァルトの3大オペラの一つで、今回の公演にて三つ全部を上演したことになります。

過去何回か「市民オペラ」が上演されていますが、メインのソロ歌手は地域の声楽家というわけにはいきません。そこでオペラを勉強しながら地域に住むソロ歌手と関係者による手作りオペラを作り出したいという趣旨で「オペラを楽しむ会」を結成しました。今回はこの会が主体になっての公演でした。大黒がこの会の代表で、事務局は全久院です。

大黒が今まで共演した声楽家に声をかけ、出演交渉をし、前回出演いただいた合唱の方々をまとめました。予算は出演者の積み立て、企業の協賛金、チケット代合わせて300万円。一昨年の1月から1年半の時間をかけ、出演者の時間調整をしながら練習を積みました。諏訪や長野の方、東京から通ってくれる方も居ましたので、時間調整は毎日のように夜遅くまで電話という日が続きました。

オペラには数千万円の予算がかかると聞きます。私たちにはそんな大きな予算というわけにはいきませんので、大道具、小道具も手作りです。檀家の方にも協力いただきました。知名度もありませんから、チケットは簡単には売れません。2回



目の公演の観客数は300人。それではこの公演は赤字です。出演者全員で必死になって売りました。公演直前に500枚を越え、ほっと胸を撫で下ろしました。

「ドン・ジョヴァンニ」は女たらしの騎士。令嬢ドンナ・アンナの父を殺してもなお、彼女を口説こうとします。さらに結婚前の女性をも口説



こうとします。さまざまな悪事を働き、最後には地獄に落ちるという内容ですが、数々の有名なアリアや重唱曲が続き歌手の技量が問われる大作です。大黒は主役のドンナ・アンナを歌い上げました。公演の初めの頃は観客もどう楽しんでよいものか、拍手もまばらでしたが、日本語の歌詞、物語の展開を分かりやすくしたということもあり、次第にオペラに引き込まれてゆきました。次はどんな展開になるのか、どんな歌が聴けるか、次を聴衆が追いかける雰囲気は私にも伝わってきました。休憩もそこそこにホールに戻る皆さんの姿が印象的でした。

前回300人の聴衆が今回500人になりました。前回来ていただいた皆さんが、今回リピーターになりさらに誘い合わせて来ていただいたのだと思います。聴衆の皆さんの「次回を楽しみにしています」のことばに励まされ、次の講演の準備を進めたいと思います。もっとレベルの高い音楽性と、手作りの親しみやすさと、ストーリー展開の分かりやすさを追求しながら、みなさんに気楽に鑑賞できる公演を作り上げたいと思います。どうぞご期待ください。

掲示板 (皆様のご参加お待ちしております)

・ ・ ・ 檀信徒護持会新年総会 ・ ・ ・

1月17日(土) 4時より全久院で開催します。全久院の催しに参加していただいている方々など、より多くの方に参加していただきたく企画しています。3時より茶室にて薄茶を差し上げます。檀家の皆様にも堅苦しくなくお茶の雰囲気に触れていただくと思います。4時より本堂にてお参り、その後座禅会の皆様と5分間座禅、4時15分より護持会総会、4時半より懇親会となります。懇親会ではご詠歌の皆さんと観音講の方によるご詠歌の奉詠を2曲お願いします。また南こうせつさん作詞作曲の「まごころに生きる」を皆さんで合唱します。次に観音講の皆さんで歌っている唱歌を2曲、みなさんにも歌詞を配り合唱していただくと思います。他にも楽しく心豊かになる企画がありましたらぜひお聞かせください。皆様の参加お待ちしております。参加希望の方は1月14日(水)までに電話でご連絡ください。



．．． 座禅会 ．．．

1月24日(土)・2月21日(土)・3月21日(土)・4月18日(土)・5月16日(土)・6月13日(土)・7月18日(土)・9月12日(土)お粥と精進料理・以上が上半期の日程です。毎回夕方4時集合。青山俊董師の市民タイムスのコラム「従容録」を住職が解説し、座禅、茶話会と進行します。9月12日はお粥と精進料理を経験していただきます。座禅を経験していただきながら、ものの見方や生き方を豊かにし、生きてゆく上での支えが見つかると思います。

青山俊董師特別講演 1月24日(土) 3時から6時まで 参加費500円

座禅会主催により、座禅会で読んでいる「従容録」をもとにお話しをいただきます。お話しを聞きたいという方は檀家以外の方でもご自由に参加できますので、お誘いあわせておいでください。



．．． ご詠歌会 ．．．

1月15日(木)・2月12日(木)・3月12日(木)・4月9日(木)2時より・5月14日(木)・6月11日(木)・7月9日(木)・9月3日(木)・
午前10時より11時半まで、白板 東昌寺副住職 飯島恵道師にご指導いただきます。全久院のお盆法要、新年会、和合会の花祭りなどにも参加します。一緒にいかがですか。

．．． 観音講 ．．．

毎月17日10時から12時半まで行います。10時から観音様にお勤め、10時20分からご詠歌、10時50分から大黒の指導で唱歌の合唱、11時20分より食事という日程です。現在15人ほどの参加者があります。気寄りが良く60代から90代の方が元気に集まって来ます。気楽な会ですのでぜひご参加ください。

お知らせ

☆ 第3教区護持会「ほのぼの文化祭」 3月15(日) 15時～17時半

全久院にて 開催します。市内の寺院の檀家さんどうしの横の繋がりを蜜にできないかという企画です。檀家さんの中にはさまざまな特技をお持ちの方がたくさんいらっしゃいます。全久院も観音講の皆さんのコーラス、と大黒の声楽、住職の茶の点前で参加します。その他、琴演奏、詩吟など、地域の繋がりを確認して、みんなで支えあっているんだと感じられる会にしたいと思います。会費は500円です。参加希望の方は電話にて全久院へお申し込みください。